



Importance of telling and empowerment for donor child.

テリングとエンパワメント

Interviewee

Ms. Emma Grønbaek

Q. 自己紹介をお願いします。

精子提供で生まれ、現在 25 歳になる。顕微授精で生まれた 2 歳違いの双子の妹たちがいる。精子提供で生まれたことをこれまで不幸せだと思ったことはない。

ブログを運営して 7 年になる。ブログを始めようと思った動機は、Donor Conception (DC) で生まれた人たちが書いたブログを見て、自分のように最初からそのことを知っていた人は非常に稀だということを知ったから。自分のことについての本 (Donor Child-A Child of Love) も出版した。インスタグラムやフェイスブックも開設している。

Q. ブログの目的は? どのような人からコンタクトがありましたか?

ブログを始める前、DC についてオンライン上にどのような情報があるか、ほとんど知らなかった。DC で子供を持つことを考えていた友人から、ドナーから生まれた経験を聞かれた。そのことが、ブログを作ろうという考えを持つきっかけになった。すぐに、オンラインで公開されている経験談を見て、DC について幸せだと感じている人の話を見つけるのが難しいということを知った。だから自分のストーリーを公開して人々にシェアしようと決心した。

これまで、自分と同じように感じている当事者、依頼親、不妊治療の業界で働いている人たちからコンタクトを受けたことがある。特に、不妊治療に携わっている人たちは、自分たちの治療の結果を知るのに長い時間を要するので、ドナーから生まれて成人した人からのフィードバック(肯定的であれ否定的であれ)をもらうことに興味を持っている。

DC を考えている親から週に何件かはオンラインのコンタクトページを通して連絡がある。その人たちが聞きたいことは、いま彼らがどの段階にいるか、例えばもうすでに子供がいるのかどうかなどによって異なる。DC で生まれた子供をどのようにサポートしたらいいか、アドバイスが欲しいという親もいれば、不妊の問題を嘆いている人(特にヘテロカップル)もいて、自分のような DC で生まれた子供の経験を聞きたがる。例えば、DC で生まれたことがわかったとき悲しかったか? とか。不妊の問題と格闘している人たちは、両親の経験についても聞きたがっている。例えば、悲嘆の段階はいずれ過ぎ去るのか? など。

Q. 両親や家族は賛成、応援してくれましたか?

両親はとてもサポーターで、ブログで公開しているオンラインの動画にも出演してくれた。自分を妊娠したとき、両親は、子供には知らせないように周囲からアドバイスを受けたが、両親は一貫してオープンなアプローチを取り、DC を恥じることは決してなかった。

両親には、自分の経験を公開してもいいか、許可を得た。両親はとてもサポーターで、家族を始めるために格闘している人たちを助ける良いきっかけになる



と賛成してくれた。父は自分が話しているそばでライブビデオを回していて、視聴者が彼に直接質問できるようにしてくれた。

Q. 両親からどんなふうにテリングを受けましたか？ 具体的なエピソードがあれば教えてください。

両親は、精子提供で生まれてきたことをストーリーにした本を作ってくれた。何度も何度も、それを読み聞かせてくれた。そのおかげで、家族全員が、この話になじんでくつろぐことができるようになった。3歳くらいから、夜の読み聞かせに使っていた。

そのストーリーを完全に理解したのは何歳の時だったかわからないが、5歳のとき、卵子と精子の絵を描いていた。だから多分そのころだと思う。自分が描いた絵は、本の表紙に使われている。

自分も、両親も、そのようにしてきたことをとても良かったと思っている。

DCについて書いた子供のための本は当時、なかった。だから両親は自分たちで作った。両親にはその才能があった。

Q. どんなとき、両親から愛されていると感じますか？ 思春期・反抗期はありましたか？ 両親との間に葛藤を経験しましたか？

子供の時から精子提供で生まれたことを自慢に思っていた。両親がいかに子供を熱望していて、そのためにたくさんの時間と努力を割いてきたかを知っていたから。6年もの不妊治療に耐えて、自分を妊娠するのに成功したとき、養子をもたらすプロセスを終えかけていたところだった。

両親はほとんど希望を捨てかけていた。両親はたくさんの時間とお金を投資し、そして自分が生まれるまで、辛い時期を耐えた。だから、自分はほかの子供たちよりも特別だといつも感じていた。

10代の頃、父親と口論したとき、「あなたは私のお父さんじゃない」という思いが浮かんだが、実際に言ったことはない。それは真実ではないし、言えばその言葉を取り消すことができないことを知っていたから。父をそのような方法で傷つけたくはなかったので、それは言うまいと決意した。

Q. ほかの DC child たちとは交流がありますか？ ほかの人たちの経験や考えについて、どう思いますか？

初めて自分の経験を公開した時、同じ高校に通う女の子から接触があった。彼女も精子提供で生まれていて、レズビアン両親と暮らしていた。それ以来、彼女とはたくさん話して、オンラインの参加者向けにライブチャットを一緒にやったこともある。

ネガティブな経験をした当事者と話すのは難しいと感じている。彼らは自分たちの状況に不満を持っていることが多いので、彼らが経験したことを理解するのに苦労するから。反対に、自分と同じような見方をしているほかの当事者とは前向きな会話をたくさんしてきた。

ネガティブな経験をしている当事者が、自分と知り合った場合、彼らは大抵、自分に対して批判的になる。不妊治療業界からお金を稼ごうとしているだけだと言われたこともあった。

自分とは異なる経験をした人と積極的に関わりたいと思っているけれど、これ



までのところ、その人たちは自分の話を理解できないことがわかった。

Q. 精子提供で生まれたことは、インパクトの大きな出来事でしたか？ それとも、もっと重要なことがありますか？

精子提供で生まれたことは自分の人生で大きな位置を占めている。なぜなら、成長する過程でこれについてたくさんのことを両親と話してきたから。自分の遺伝子の50%を知らないことは大きなことだし、特に医学的な事柄には関心がある。自分の家族歴にアクセスできないことにそこまで強いストレスを感じることはないが、ドナーの病歴についてこれまで知らなかったことを知り、それを自分の主治医に伝えることができれば、それは良いことだと思う。

オンラインコミュニティに積極的にコミットする前は、DCについてあまり話す機会はなかった。自分の経験についてたくさんを話しているが、それは今、自分がたまたまそういう時流に乗っているからだと思う。

Q. 成長して、父親と遺伝的つながりがないということの意味をはっきりと理解した時、どう感じましたか？

自分と父親が遺伝的に関係していないことを理解したときの、特定の瞬間や感情を思い出すことができない。いつもそうだと思って育った。ちなみに、自分は母親によく似ている。

小学校の1年生か2年生の頃、ドナーの外見にとっても興味を持っていた。自分はドナーと同じくちびるを持っているかどうか？ これらは家族内でのオープンに話

されていた。自分の特徴について単純な好奇心を持っていた。

Q. 学校で、友人の家族とは違うと気がついたとき、どう思いましたか？ どのように適応しましたか？

自分の家族がほかと違うことは知っていた。学校の最初の年に、クラスの生徒に家系図(family tree)を描かせる時間があった。母親が医療分野で働いていたこともあり、「本当の」家系図がどうなっているかをすでに知っていたので、木を描くのは難しいと先生に告げた。先生はかなり否定的な反応になり、自分が特別に見えるように嘘をついていると言って両親に電話をかけた。それで両親は先生に実際の状況を説明しなければならなかった。

この先生の反応には驚いた。自分が悪いことをしたかのように扱われた。自分の家族が愛情で満たされているということ自分を自分は伝えただけなのに。

Q. ドナーはどのような存在ですか？

ドナーに会いたいとは思わない。ドナーは当時のデンマークの法律によって匿名の存在。今は希望すればオープンドナーを選べるけど。匿名のドナーでも満足している。ドナーの情報にアクセスすることができないが、それはドナーを探し求める必要がないということ。

ドナーに対しては、折にふれてあげがとうと心の中で伝えている。そして彼が自分の存在を思い煩わないように願っている。精子を提供したことを後悔して欲しくない。ドナーに会いたいとか、ドナーについて知りたいとか思わない。



デンマークでは 23 and Me などの遺伝子検査は、米国ほどポピュラーではない。それらを利用することに特別関心を持ったことはない。どういう結果になるかわからないし、それがポジティブなものとは思えない。半きょうだいや、ドナーとコンタクトを取りたいとは思わない。

Q. もし、将来、ドナーの方からコンタクトがあったら、会いますか？

ドナーからどういう風にアプローチされたか、自分に何を望んでいるかによると思う。

もし、自分に会って、自分に問題がないか、そしてただコーヒーを飲むだけでそれ以上がないなら、それは問題ない。でも、彼が自分の人生に関係しようとしてきたりするなら、断る。

ドナーについては、自分の父親の特徴（瞳の色や身長）にマッチしていること以外、まったく何も知らない。ドナー番号すらも知らない。ドナーから生まれた人の多くにとって重要なことの1つは、ドナーが提供した動機だが、これは私にとっては大した問題ではない。自分の存在と人生を作ってくれたドナーの役割にとっても感謝している。しかし、ドナーの利得や彼の意図は、自分と自分の家族の幸せに比べれば副次的なものだ。

Q. ドナーに会いたい人もいれば、あまり関心がない人もいます。‘遺伝的つながり’について、どのように感じますか？

ドナーから生まれた人たちのコミュニティがあり、そこで活動している人たちの声は非常に大きくて、いろいろな研究の中でも過大評価されていると思う。自分のように感じている人たちの方が多い

のではないかと思います。そういう人たちは研究に含まれていないだけではないかと思う。

誰かが DC で生まれると、多くの場合、裏切りがあった。それらの人々はしばしばドナーから生まれたことについて知らされていなかった。それは、その人たちがそれについてどのように感じるかにおいて決定的な役割を果たす。遺伝は重要だけれど、それに執着している人たちのことを理解するのに苦労する。それは私たちの文化、家族のイメージなどの一部だが、どんどん変化している。「あなたは、お母さんかお父さんに、よく似ている」とか言われるのは社交上のこと。しかし、DC が現れる前でも、片方または両方の親と遺伝的に関係のない人はたくさんいた。今日では、ドナーについてできる限り多くの情報を得るために、規制を求める声が強くなってきている。

Q. オープンドナーの方が望ましいでしょうか？ これから親になる人は、どちらを選ぶべきですか？

これは難しい質問だと思う。両親が自分たちの決定に確信を持っていることが重要。オープンドナーでも、匿名ドナーでもどちらでも良いと思う。どちらを選ぶかより、ドナーから生まれた事実を、子供との会話の中で親がどのように扱うかの方が重要だから。つまり、どのように子供に伝えるか、その結果、子供が出生の事実についてどのように感じるかということ。

デンマークでは、オープンドナーに期待を寄せる依頼親も出てきている。18歳以上になれば、ドナーの情報を得られるという期待を持って子供が待ち続けた結果、どうなるかは十分わかっていない。



何が起こるかまだわからない。それぞれに長所と短所があるので、それは簡単な選択ではない。

Q. デンマークのドナーに関する法律について、どう評価しますか？

これも難しい質問。何か法改正をするなら、それは子供と家族にフォーカスすべきだ。

どのような選択をし、何を期待するかについてより良い決定ができるよう、両親に対するサポートがもっと行われるべきだ。

ドナーから生まれた事実を子供の medical history に記載するというオプションもあるだろう。そうすれば、フォームなどに記入するときに、この情報を提供できる。現在は、医療領域の知識が不足しているため、ドナーから生まれた人々にとって不利益になる可能性がある。

Q. ドナーから生まれた人のためのサポートグループに参加していますか？

ほかのサポートグループでは活動していない。自分のネットワークを持っていて、共同で何かをしたいと思っている人から連絡があったときは、進んで手伝う。両親もほかのグループに参加していない。両親は自分のチャンネルに対してサポートしてくれたけれど、自分たちの仕事に忙しい。

数ヶ月前、両親の仕事仲間の子供が、家族を作るために DC を使用することを検討していたため、DC について自分と自分の両親と、非公式に話をした。このように、求められたら、積極的に応じるようにしている。

Q. 将来、ご自身が、(もしそのような状況になったら) 精子/卵子提供で子供を持つことはありえますか？ 養子についてはどうでしょう？

もちろん、そうする。DC でも養子でも。

Q. “Donor Child” でよかったと思うことは何でしょうか。逆にどのような困難がありますか？

いつも自分は特別だという気持ちがあり、その気持ちを人生の他の領域に向けてることができた。それはエンパワーだと言える。

課題は主に、ドナーから生まれたことの結果として、自分が知らない事柄に関連している。たとえば、20歳のときに、乳糖不耐症であることがわかった。それを知るのに長い時間がかかった。将来自分の子供か欲しいと思ったとき、これらの、わからないということが、チャレンジとなるかもしれない。

Q. その他のコメント。

2歳年下の双子の妹たちがいる。彼女たちは精子提供ではなく、顕微受精で生まれた。

その技術は、自分の時には使えなかった。よく聞かれるのは、父親と遺伝的につながっている妹たちがいて、自分は父親と繋がっていないということについてどう思うかということ。少なくとも自分の家族について言えば、そのことは家族の関係性に影響することはなかった。

(2021年12月)



Ms. Emma Grønbaek [Link](#)

1996年に匿名の精子提供で生まれた。双子の妹たちは、1998年顕微受精(ICSI)で生まれ、両親と遺伝的に繋がっている。テリングは幼い頃から受けている。看護師として働いている。

Instagram -[Link](#)

Facebook -[Link](#)

著書



DONOR CHILD

A CHILD OF LOVE

EMMA GRØNBAEK

Emma Groenbaek, *Donor Child: a child of love.*
Copenhagen, Saxo, 2021